



Aさん物語

1

その昔

Aさんは朝5時に起きます。そして、起きてすぐにシャワーを浴びます。

しかし、体を洗うのに時間がかかり、8時までお風呂場にいます。その後は朝ごはんを食べ、8時3分から歯を磨き始めます。

しかし、歯が黒いので磨くのに時間が掛かります。9時半まで歯磨きます。

10時15分前に家を出ます。よぼよぼと会社まで歩きます。

10時半ぐらいに職場につきます。いつも遅れるので、Cさん社長に怒られます。11時から30分ぐらいしくしくと泣きます。

12時になると、インターネットでコソコソと日本語の練習をし始めます。

13時には、同僚たちと昼ごはんを食べに行きます。Aさんは毎日必ず寿司を食べます。どうしてかということ、彼は毎日寿司を食べればきっと日本人になれると思っているからです。

16時ぐらいに、おなかが痛くて薬を飲みます。17時半には仕事が終わります。仕事の後は、よく日本人の友達Bさんと喫茶店で待ち合わせをします。

19時になると、Aさんの大好きなテレビ番組が始まるので、急いで家に帰ります。Aさんの大好きな番組はナルトという日本アニメです。Aさんは毎日日本アニメを見たら、きっと日本人になれると思っています。

20時に、大好きな日本アイドルの最新アルバムを聴きながら一人で夕食を食べます。

20時半に秋葉原のガイドブックを読みながら、日本に行ける夢を見えています。21時に、Bさんに電話します。電話が切られるまで日本アイドルについて色々話します。Aさんの一番好きなアイドルは宮崎アユミです。できれば彼女と結婚したいと思っています。そのために日本人になろうとしています。

23時に、Aさんは寝ます。

その式

今日は、AさんとBさんが日本の本屋さんで待ち合わせしました。

店員1：「いらっしゃいませええ！」

店員2+店員3+店員4：「いらっしゃいませええええ！」

Aさん：「・・・こんにちは。あっ!Bさん!」

Bさん：「やあ、Aさん。元気か？」

Aさん：「はい、私は元気です。Bさんは、お元気ですか？」

Bさん：「はいはい。さ、どんな本がみたい？」

Aさん：「そうですね。アイドルの本が見たいです。」

Bさん：「またアイドルか。なあ、それ以外興味があるものはないのか？日本の歴史とか。」

Aさん：「アイドルの歴史の本はあるのでしょうか。」

Bさん：「あるわけないと思う。店の人に聞いてみれば。」

Aさん：「そうですね。Bさん、聞いてきますので、ここにいてください。」

Bさん：「わかった。」

Aさん：「すみません。」

店員3：「はい。何かお探しでしょうか。」

Aさん：「私は日本のアイドルの歴史についての本を探しています。」

店員3：「へっ、アイドルの歴史ですか？・・・どういった内容なのでしょうか。」

Aさん：「アイドルの歴史。」

店員3：「そうですね。少々お待ちください。」

店員3：「あのさ店員2、そこにいる変な客がアイドルの歴史みたいなもんをさがしているんだけど、そんなのはないよね。」

店員2：「アイドルの歴史？なにそれ？」

店員3：「やっぱりないね。ありがとう。」

店員2：「まあ一応存在するかもしれないけど、うちはそんな変なやつはおいてない。」

店員3：「うん、ありがとう。」

店員2：「インターネットで検索してみたら？」

店員3：「めんどくさいからいいや。じゃあ、戻るね。」

店員3：「大変お待たせしました。大変申し訳ないですが、お探しのご本はこちらにおいてありません。」

Aさん：「そうですか。それはとても残念です。ありがとうございました。」

Bさん：「なんだって？」

Aさん：「ありませんでした。」

Bさん：「だろうね。ほら、これみて。日本史の本だよ。どう？買ってあげようか？」

Aさん：「いいえ、結構です。」

Bさん：「なんでよ。私が払うから、ね。」

Aさん：「Bさん、私は日本史には興味がありません。」

Bさん：「じゃあ、これは？日本女性をナンパする方法だって。」

Aさん：「本当ですか。是非買いたいです。」

Bさん：「なんて嘘です。そんなのはあるわけないだろう。」

店員1：「ございます。」

Bさん：「へ？何がですか。」

店員1：「日本女性をナンパする方法の本です。ご案内いたします。」

Bさん：「まじかよ。」

Aさん：「あああ、お願いします!」

店員1：「どうぞ、ごゆっくりご覧ください。」

Aさん：「ありがとうございます!」

Bさん：「なんだこりゃ。"日本女性を必ず手に入れる方法"って誰がこんなばかばかしい題名の本を買うわけ。」

Aさん：「Bさん、買ってください。」

Bさん：「へ？いやだよ。」

Aさん：「さっき買ってくれるとあったでしょう。」

Bさん：「恥ずかしいよ。」

Aさん：「お願いします。」

Bさん：「もうわかったよ。まったく!」

Bさん：「はい、これお願いします。」

店員2：「"日本女性を必ず手に入れる方法"を一冊。店員3、レジをお願いします。」

店員3：「はい、"日本女性を必ず手に入れる方法"を一冊。いくらでしたっけ。店員4!"日本女性を必ず手に入れる方法"はいくらですか?!」

店員4：「"日本女性を必ず手に入れる方法"ですか?!」

Bさん：「おいおい、叫ばなくていいでしょう。」

店員3：「はい、"日本女性を必ず手に入れる方法"です。」

店員4：「"日本女性を必ず手に入れる方法"は60ユーロです!」

店員3：「お待たせしました、"日本女性を必ず手に入れる方法"を一冊、60ユーロになります。」

Bさん：「しかも高いなあ。はい。」

店員3：「40ユーロのお返しです。ありがとうございました!」

店員2+店員1+店員4：「ありがとうございましたあああ!」

Aさん：「ありがとう、Bさん。」

Bさん：「うん。すぐ鞆にしまっといて、恥ずかしいから。」

Aさん：「さて、こんど日本のレストランに行って、日本女性をナンパしましょうよBさん。」

Bさん：「一人で行けよ。じゃあ、俺帰るから、またな。」

Aさん：「はい。またね、Bさん。」

その参

Aさんは小さい頃から、ずっと日本のアニメやゲームが大好きでした。

16歳になったとき、日本語の授業を受け始めました。先生はキレイな日本の女性でした。Aさんはその先生のことを段々好きになってしまいました。

ある日、先生に告白しました。先生はとても驚きましたが、かわいい生徒のことを傷つけないようにやさしく嘘をつきました。「私は日本人としか結婚できません」と言いました。Aさんはすごくがっかりしました。その時、絶対に日本人になると決意しました。一生懸命日本語を勉強しました。しかし次の年に先生が日本に帰ってしまいました。Aさんはとっても寂しくなりました。その時は18歳でした。しばらく日本語の勉強を辞めることにしました。

あの時から数年が経ち、今は仕事をしながら色々な教科書を使って日本語を独学で勉強しています。昔の目的が戻ってきました。Aさんは日本人になろうとしています。彼はよく、よく考えました。そうすると、なる方法は一つしかないという結論が出ました。それは、日本人と結婚することです。そのためには、先週「日本女性を必ず手に入れる方法」という本を友達Bさんに買ってもらいました。しかし、Aさんはできれば大好きなアイドルと結婚したいです。そのアイドルの名前は浜崎アユミという大人気な歌手です。

Aさんは、目的どおり、結婚できるのかな？

その四

日本食のレストランの前で。

Aさん：「Bさん!お待たせしました。」

Bさん：「遅いよ!30分も待ってたよ。」

Aさん：「ごめんなさい、Bさん。バスがなかなか出発しなくて・・・」

Bさん：「じゃ、入ろう。外は寒いから。」

店の中で。

Bさん：「何食べようかなあー」

Aさん：「ちゃんと持ってきましたよ。」

Bさん：「ん?何を?」

Aさん：「本ですよ。はい。」 (Aさんは「日本女性を必ず手に入れる方法」という本を鞆から取り出します。)

Bさん：「うそ!マジでもってきたのかい!!ありえない。それで、どうするつもり?」

Aさん：「だからこのレストランのきれいな日本女性を手に入れます。」

Bさん：「まさか!本当に信じてんのかい。」

Aさん：「ナンパする方法はちゃんと書いてあるのですよ。」

Bさん：「あははは。ナンパする方法ね。まあ、勝手にしろ。」

Aさん：「では、レッスン・・・あった。」

Bさん：「なんて書いてある?見せて。"自信を持って、気になった日本女性に近づきましょう。そうして、ニコニコしながらお名前を聞きます"。ばかじゃないこれ。はい、Aさん、応援するからどうぞ。あははは。」

Aさん：「どうしょう。あそこにバーに座っている女にしましょうか。」

Aさん：「あの子ね。まあ、なかなかきれいだね。あはは。いってらっしゃい。」

バーのところ。

Aさん：「こんにちは。日本人ですね。私はAサンと言います。あなたの名前はなんですか。」

女性：「えっ。こんにちは。私の名前ですか。芋子ですが。」

Aさん：「イモコさんですね。分かりました。」

Aさんが自分のテーブルに戻ります。

Bさん：「はは、もうあきらめたのですか。」

Aさん：「いいえ。レッスンの続きを読んでください。」

Bさん：「いいよ。どこだっけ。"そうして、女性を褒めましょう"。だって。」

Aさん：「では、いってきます。」

Bさん：「変なやつ・・・」

バーのところ。

Aさん：「きれいな名前ですね。」(ニコニコ)

芋子さん：「はい？」

Aさん：「あなたの名前はきれいだと思います。」

芋子さん：「あ、そうですか。ありがとうございます・・・」

Aさん：「イモコさんの髪の毛はきれいですね。」

芋子さん：「髪の毛ですか。ありがとう・・・」(ニコニコ)

Aさん：「イモコさんの目は何色ですか。」

芋子さん：「目の色？黒ですが。」

Aさん：「とてもきれいだと思います。」(ニコニコ)

芋子さん：「はい、それはどうも。」

Aさん：「口もきれいです。」(ニコニコ)

芋子さん：「あ、う、私は褒められるのは苦手なので、もうしわけないですが止めていただけますか。恥ずかしいので。」

Aさん：「分かりました。芋子さんの言うこともきれいですね。」(ニコニコ)

芋子さん：「へえ？とにかく、自分のテーブルに戻ってもらえます？」

Aさん：「・・・」

その時は、Aさんの目から涙が出てきました。

芋子さん：「へえ。泣いてるの？」

Aさん：「すみませんでした。私は、ただイモコさんを褒めたかっただけです。」

芋子さん：「それは有難いですが、私はちょっとそういうの苦手なので・・・ちょっと、泣かないで、恥ずかしいから。ね!」

Aさん：「ごめんなさい!」 Aさんがものすごく泣いています。

芋子さん：「もういいから、泣かないでね。」

Aさん：「ごめんなさい!」

芋子さん：「分かった分かった!じゃあ、褒めていいから。」

Aさん：「本当ですか？」(ニコニコ)

芋子さん：「はいはい。」

Aさん：「ちょっと待ってください。」

芋子さん：「あ、はい・・・」

Aさん：「Bさん、早く続きを読んでください。」

Bさん：「今泣いてたでしょう？ちょっと、あきらめたほうが」

Aさん：「続きを!お願いします。」

Bさん：「分かった分かった。続きはね、"それで、キスをしましょう"。はは。それでキスカよ。」

Aさん：「いってきます・」

Bさん：「待てよ!」

バーのところ。

Aさん：「芋子さん。」

芋子さん：「なんですか、また？」

Aさん：「キスします。」

芋子さん：「は?ちょっと!」

Aさんは急にキスしてしまった。

芋子さん：「もういい!!」

芋子さんがビンタをします。

Aさん：「私と結婚しませんか。」

芋子さん：「するわけないでしょう。バカ!!」

芋子さんが急いでレストランを出てしまいます。

Bさん：「だからダメだといったでしょう。」

Aさん：「なんでビンタされましたか。」

Bさん：「当たり前でしょう。とりあえず、この本を捨てろよ。」

Aさん：「でも、どうしたらいい?」

Bさん：「なにが?」

Aさん：「私、日本人の女の結婚しないといけません。」

Bさん：「バカじゃない。変な考えは止めてくれ。」

Aさん：「分かった!」

Bさん：「なに?」

Aさん：「いい考えがありました。」

Bさん：「なになに?ちょっと、どこ行くの?」

Aさんは店を出ました。

Bさん：「なんだよ、もう!・・・ おなかすいた。」

その五

Bさんが注文しようをしているときに、誰かに声をかけられます。

女性の声：「どこ行ったの？」

Bさん：「ん？なんですか？ あああ！ あなた！ さっきの女の人でしょう！」

芋子さん：「あの人はどこ行ったのよ。」

Bさん：「さあ。急にレストランから出てしまって。すぐ戻ってくると言ってたけど。」

芋さんが座ります。

芋子さん：「来るまでここで待つね。」

Bさん：「あっ、どうぞ。彼のことあまりいじめないでね。ちょっと頭がおかしいから・・・許してあげましょうね」

芋子さん：「うん。彼の名前はなんというの？」

Bさん：「Aさんといいます。」

芋子さん：「エーサンか・・・何歳？」

Bさん：「んと、22歳でしたっけ。なんでこんなことを聞くのですか。」

芋子さん：「なんとなく、気になる。」

Bさん：「へ？さっきピントしたでしょう、突然のキスで。」

芋子さん：「そうね。私が悪かった。」

Bさん：「えっ！あなたが？違うでしょう！あの子が変なことするからいけないのでしょうか。」

芋子さん：「あの時はびっくりして。確かにいやだったけど。その後よく考えてみたら、あんな風に褒められるのは初めてだったし・・・だからここに戻って、彼と話をしようと思いました。」

Bさん：「言ってることがさっぱり分からない。」

芋子さん：「いいよ、分からなくても。とにかく、エーサンさんと話したい。」

Bさん：「Aさんさん？(なんだか、この子も頭が変)。あのう、私おなかが空いているので、注文していい？」

芋子さん：「どうぞ。エーサンさんはまだかな・・・」

Bさん：「すみません！ええっと、B定食を一つお願いします。」

芋子さん：「エーサンさんどこかな・・・」

Bさん：「そういえば、私の名前はBです。」

芋子さん：「うーん。エーサンは恋人いる？」

Bさん：「へ？いないいない。(いるわけないだろう)」

芋子さん：「そっか。彼のタイプはどんな人？」

Bさん：「タイプ？あの子はただ日本人女性が好き。ちょっとオタクっぽいやつだよ。」

芋子さん：「うーん。そのために日本語を勉強しているんだよね。かわいい。」

Bさん：「かわいい?!どこが!ただ日本人だったら誰でもいいってことなんだよ。それがかわいいのかい。」

芋子さん：「ぐふ。」

Bさん：「ぐふじゃないでしょう！」

Aさん：「イモコさん！」

Bさん：「おお、戻ってきた!どこ行ってたよ!」

芋子さん：「エーサンさん!やっと来たわね。」

その六

Aさん：「イモコ、さっきは本当にすみませんでした。」

Bさん：「なんでじゃが芋の話が出てくるのさ？」

芋子さん：「エーサンさん、私のほうが悪かった。彼氏と別れたばかりなので、ちょっと機嫌が悪かったの。」

Aさん：「でも、私は勝手にキスをしたので、怒られるのが当たり前です。」

Bさん：「そうよ、当たり前だろう。」

芋子さん：「キスはね・・・でも実はあれは、よかったの。」

Bさん：「は??」

芋子さん：「Aさん。外に行って二人で話しましょう。」

Aさん：「分かりました。」

Bさん：「なにそれ!!おっおい!一人ぼっちにしないでよ。」

Aさんと芋子さんが川を歩いています。

芋子さん：「エーサンさんはどうして日本語を勉強しようと思ったのですか。」

Aさん：「小さいころから日本のアニメが大好きだからです。日本は素晴らしい国だと思います。」

芋子さん：「えっ、そうなんですか。いつ日本に行ったの？」

Aさん：「まだ行ったことないです。」

芋子さん：「行ったことないのに、素晴らしいと思うのですか?どうして。」

Aさん：「素晴らしいところだと信じているからです。」

芋子さん：「そうですか。私は日本が大嫌いで、この国に来ました。」

Aさん：「私はここより日本がいいです。」

芋子さん：「なんとなく気持ちが分かるかも。でも、日本に行ったときがっかりすると思う。」

Aさん：「しません。私、心の中は日本人です。だから、がっかりはしません。私のいるべきところは日本です。」

芋子さん：「・・・・・・・・そうなんですか・・・・・・・・」

公園に着きます。

芋子さん：「あの、確認したいことがあるの。」

Aさん：「なんですか。」

芋子さん：「もう一度・・・キスを・・・キスをしてください。」

Aさん：「・・・いいですか。」

芋子さん：「うん。」

芋子さんが目を閉じます。そうして、Aさんの顔が近づきます。

その時、とんでもないことが!!

その七

七郎は公園の入り口で立っていました。30分前に、別れたばかりの元彼女から不思議な電話が来ました。理由を話さずに、公園で会いたいと言われました。寒さの中でずっと待っていました。そうして、彼女が見えてきました。しかし、一人ではなかった。フランス人の男と一緒に歩いていました。誰だろうと七郎が思いました。そうして、突然、その二人が止まって、男の人が彼女にキスをしようとしてしました。それを見た七郎はドキドキしてしまいました。走って、二人のほうへ向かいました。

七郎：「イモちゃん! どういうこと!」

Aさんがキスをしようとした時に、イモコがさっと顔をこっちに向かせました。

芋子：「あら、七郎君。いたの?」

七郎：「君に来いと言われたからだろう。話ってなんだよ。それで、なんだこいつ?」

Aさん：「・・・こんにちは。私はAサンと申します。よろしくお・・・」

七郎：「よろしくない! イモちゃん、悪かった。今気づいた。やっぱり、イモちゃんのがまだ好きだ。ごめん。また付き合おう。な。」

芋子：「分かった。いいよ、付き合っても。」

Aさん：「へえ、どういうことですか?」

芋子：「あんたとは関係ないでしょう。ねえ、七郎君、散歩しようよ。」

七郎：「うん。」

芋子：「アイス買ってくれるでしょう?」

七郎：「もちろん。」

芋子：「ああよかった、七郎君との仲直りができて。寂しかったよ。」

七郎：「オレも。」

二人がどんどん遠くへ行きました。Aさんがショックを受けて、動けませんでした。何が起こったのか、全く理解ができませんでした。

その八

明日、Aさんは小さい頃からずっと行ってみたかった日本へ出発します。あまりにも楽しみにしすぎて、昨夜は眠れませんでした。彼が想像している日本はこうです：

空が見えないほどあちこちに超高層ビルがあって、道は人で込んでいます。日本人男性はエロ漫画を読みながら仕事まで歩いています。道の角に侍が人々を見守っています。そこそこきれいな芸者がにこにこことほほ笑みながらぶらぶらと走っています。もちろん、短いスカートを着た学生の女性もいます。たくさんいます。

Aさんはその日本を想像して夢中です。鼻血がでてきたところにちょうど電話がなります。急いでティッシュで顔を拭きながら電話に出ます。

Aさん：「allo?」

女性の声：「あっ、もしもし。こちらジャルの田中と申します。お忙しいところ申し訳ないのですが、明日の便についてご連絡いたします。」

Aさん：「ハイ、ナンデショウ。」

JALの人：「安全のため、お客様が乗る予定の便がキャンセルされてしまいました。」

Aさん：「QUOI????」

JALの人：「boturu boru a été anyulé」

Aさん：「もしもし?」

JALの人：「はい、もしもし?」

Aさん：「キャンセルされた理由は?」

JALの人：「そうですね、」

と、急に電話が切られてしまった。

いったい、何が起こったのでしょうか? 気になるでしょう。

その九

Aさんがジャルにもう一回電話してみます・・・

ジャルの会社員 「もしもし、ジャルの高化郎です。」

Aさん 「タカカロウさん ですかあ・・・ 不思議な名前ですね。」

高化郎 「どのようなご用件でしょうか？」

Aさん 「あ、はい。えっとですね、先ほどこちらからの電話が来て、私が乗るべき便がキャンセルされたという話になっていましたが、急に電話が切られてしまって、結局どうになっているかわからなくて、とても不安になっています。」

高化郎 「なるほど。」

Aさん 「・・・で、どうですか？」

高化郎 「うーん、お気持ちわかります。」

Aさん 「・・・わかってくれて、ありがとう。・・・で、どうすればいいですか？」

高化郎 「私なら、旅行会社に電話して情報を調べてみます。」

Aさん 「だからあなたに電話しているじゃないですか」

高化郎 「なるほど。」

Aさん 「・・・で、情報は？」

高化郎 「ありますよ。」

Aさん 「・・・教えていただけないのでしょうか？」

高化郎 「お知りになりたいのですか。」

Aさん 「はい、知りたいです。」

高化郎 「では、少々お待ちください。」

Aさん 「はいはい・・・」

風引いた女性の声 「もしもしお電話変わりました」

Aさん 「もしもし、キャンセルされた53号の便について電話していますが」

女性 「もしかして、A様ですか。先ほを電話が切られてしまいました家田菜と申します。」

Aさん 「ヤダナさんですか。・・・で、私はどうすればいいのですか。本当に飛ばないのですか？日本に行きたいのですが私。本当に行きたいんだから、なんとかしなさい。お願いします。行きたいんだから。」

ヤダナさん 「落ち着いてくださいませ。確かに、飛行機は明日飛ばないのですか、申もしよろしければその代わりにヘリコプターで行くことも可能です。」

Aさん 「へ・・・へ・・・ヘリコプターああ？ですか？ちょっと時間がかかりそうじゃないですか？」

ヤダナさん 「たしかに、少し長いかもしれません。三日ぐらいだそうです。」

Aさん 「いやだな」

ヤダナさん 「はい、ヤダナです。」

Aさん 「でしょう!」

ヤダナさん 「・・・」

Aさん 「あのう、ひとつを聞いていいですか？」

ヤダナさん 「どうぞ」

Aさん 「恋人はいますか？私は日本人の女性がとても好きで、付き合いたいと思います。」

ヤダナさん 「いやだな・・・」

Aさん 「もしもし？」

ヤダナさん 「いますよ。」

Aさん 「結局私は明日どうすればいいんですか？」

ヤダナさん 「ジャールのカウンターに来てください。返金差し上げますので。」

Aさん 「わかりました。では。」

ヤダナさん 「では。」

Aさん 「本当に付き合ってくれないですか？」

ヤダナさん 「いいよ、じゃ」

Aさん 「お、本当ですか？」

ヤダナさん 「本当なわけないだろうこのやろう!もうなんなのよこの国!フランス人のバカヤロウ。こりゃカウンターにくるときぶっ殺してやるぜ。ったく」

Aさん 「あ・・・すみませんでした。」

ヤダナさん 「きるよ」

Aさん 「あ・・・はい・・・」

ジャールの人って変わってるね、とAさんが思い込んでしまった。

「こんどアナにしましょう。」

それで、Aさんがアナのおかげでやっと日本への飛行機に乗ることができました。飛ぶのが怖くて、倒れてしまいました。そうすると、旅中はずっと寝ていました。

それで、やっと成田空港に着陸します。

そこで、またとんでもないことが行ってしまいます !!!!

その十

Aさんがゆっくり飛行機を出ます。

((やっと日本に着いた!))

パスポートチェックのところにつきます。そこで、たくさんの人が並んでいます。

((時間がかかりそうだな・・・お、あそこ誰もいない!))

「日本人」のところに向かいます。窓口近づくと、急に後ろからおまわりさんが叫んできます。

お巡りさん 「おおおおおおおい。ちょっと君!そっちはダメだよ。ジャパニーズだけ。君はその隣に並びなさい。ほら、早くして、早くして。」

Aさん 「でも、誰もいないし、行ってもいいでしょう。」

お巡りさん 「だめだめ。ここ日本だから日本のルールを守りなさい。ジッス・イズ・ジャパン。さ、早く行って。」

Aさん 「でも・・・」

「だからはやくあっちに」とお巡りさんがAさんの腕を捕まえて、向こうの窓口まで連れて行ってしまいました。

「ほら。その紙に書き込んでください。はい、これ。」お巡りさんがAさんにペンを渡して、どっか行ってしまいました。

((申し込み書か・・・))

係員 「次の方」

Aさん 「こんにちは」

係員 「パスポートを」

係員 「写真撮りますので、動かないでください」

係員 「ここに親指を押してください」

係員 「その紙を」

係員 「日本は初めてですか？」

Aさん 「はい。とても楽しみしています。」

係員 「フランスの方ですか。」

係員 「あれ？旅行の目的は((浜崎あゆみと結婚する)) ですか？」

Aさん 「はい!彼女がとても美人で、プロポーズしたいです!」

係員 「知り合いですか？浜崎あゆみさんと?・・・」

Aさん 「いいえ、まだあったことがないです。」

係員 「・・・そうですか。まあいいか。」

係員 「あれ？滞在中の住所は ((ラブホテル)) ですか？」

Aさん 「はい。」

係員 「ちょっと、まじめに書き込みなさい。」

Aさん 「でも、本当ですよ。もうインターネットで予約したし。見てください、予約の紙を印刷しました。」

係員 「・・・ほんとうだ・・・じゃあ・・・そのホテルの住所を書いてください。」

Aさん 「はい」

係員 「ちょっとまって!なにこれ!メールアドレスが((yakuza69bakayarou7geisha@hotmail.co.jp))ですか?・・・」

Aさん 「はい、格好いいでしょう。」

係員 「格好いいっていうか・・・はい分かった、じゃあ、進んでください、人が並んでいますから。」

Aさんが日本の初めての一方をします。

空港の中で電車の入り口を見探していたら、よく知っている顔を発見してしまいます。

Aさん 「あっ・・・あゆみさああああん!」

浜崎あゆみ 「ん?」

その十一

「ちょっと君、みんなと同じように並んでください」

浜崎オタクがサインをもらうために、何人も並んでいましたが並びました。Aさんは一番後ろに立って待ちました。

オタク1 「ぐふ、本物かわいいな」

オタク2 「モエ」

Aさん 「あのう、すみません。」

オタク1 「なんだ君は。君も浜崎が好きなのか？」

Aさん 「はい、好きです。あのう、どうして浜崎様が空港に？」

オタク1 「今さパリから帰ってきところですよ。」

Aさん 「パリ から ですか？もしかして、アナの便で31号？」

オタク1 「おお、よく知ってるよね。」

Aさん 「ってことは私と同じ飛行機に乗っていたのですか？」

オタク1 「へっ？うそ!」

オタク2 「モエ〜」

オタク1 「うはああああ、君が浜崎様と同じ飛行機に乗っていたなんて最高じゃないですか!うわああああ。ちょっとにおいかいでいい?浜崎様の香りに移っているかもしれない!」

オタク2 「モエえええ!!!!」

3時間後、やっとAさんの番になります。

あゆみ 「どうぞ。」

Aさん 「こんにちは。」

あゆみ 「どこの方ですか?日本語がお上手ですね。」

Aさん 「私はフランス人です。」

あゆみ 「あ、昨日までパリにいましたよ。フランスは美しい国ですね。日本語は大学で勉強したのですか。」

Aさん 「いいえ。大学の専門は洗濯機でした。日本語は独学で勉強しました。」

あゆみ 「洗濯機 ですか・・・面白いですね。」

Aさん 「浜崎様も洗濯機が好きですか。」

あゆみ 「あたしは別に。面白いというか、変わっているなと思っただけで。」

Aさん 「あのう。実は、浜崎様と結婚したいです。だから日本に来ました。」

あゆみ 「へっ・・・嬉しいですが、あたしは彼氏がいますし・・・」

Aさん 「ジュン君のことですか。」

あゆみ 「あれ、彼氏の名前まで知っているんですか。」

Aさん 「うん、雑誌で読みました。」

あゆみ 「なるほど・・・最近彼は頭がぼけていて、老人ホームに入ってしまった。」

Aさん 「もう年取っていますね彼は」

あゆみ 「でも、まだほんの60ですし・・・」

Aさん 「そうですか・・・」

あゆみ 「あのう、あたしそろそろ行かないと」

Aさん 「分かりました・・・」

あゆみ 「・・・あのう、これ。」

浜崎さんがAさんにサインした写真を渡します。

あゆみ 「自分のメールアドレスも書いたので、暇なときはメッセージを送ってくださいね。」

Aさん 「ありがとう、浜崎様。」

オタク1がそれを遠くから見て、「へえええ、浜崎様のメールを教えてもらったのかあああ。うそ!!!うそおおおお!!」

浜崎さんは立って、Aさんを見て、笑い顔だして、行ってしまいました。

そのあとは、Aさんがホテルに行きます。

入り口に着きますと、後ろから声がかかります。

オタク1 「おおい!お待ちください!」

オタク2 「もええええ!!」

その十二

Aさんがラブ・ホテルに着いたとき、後ろから声をかけられました。

ヲタク1 「おおい!お待ちください!」

Aさん 「あ、さっきの人だ!」

ヲタク1 「ああ、疲れた。君足が速いね。」

Aさん 「なにか?」

ヲタク1 「そうそう。君さ、浜崎様からメールを教えてもらったでしょう。」

ヲタク2 「ぐふふふふふふーモエー!」

Aさん 「あっ、見てたんですか。」

ヲタク1 「とりあえず、そのメールをちょうだい。」

ヲタク2 「ちょうだい、ちょうだい、ちょうううだい!」

Aさん 「いや、でも、私にくれたし、ほかの人に渡したら、怒られると思います。」

ヲタク1 「ちょっと、頼むんだからちょうだい。ほら、くれたら、そのLimited Editionの最新アルバムをあげるんだから。」

ヲタク2 「ちょっちょっちょっ先輩!それは、ダメでしょう。浜崎様の指紋がカバーについているし。」

ヲタク1 「田中君、大人というものは、人生の中で、犠牲を強いられる時がある・・・」

ヲタク2 「いややややや、じゃじゃじゃじゃ、渡すまえにもう一回嗅がせてもらおううう」

Aさん 「あのう、私はそのCDいりません。」

ヲタク1 「なんだと!」

Aさん 「もう、すでに持っていますし。では、失礼します。」

ヲタク2 「うわわわああわああ。せっせんぱいどうしますう?」

ヲタク1 「ちょっとどこ行くんだよ、話しているだろう」

Aさん 「ホテルに入ります」

ヲタク1 「一人でラブホテルに入ってどうするんだよ」

ヲタク2 「いやややや、きっと、浜崎様のビデオなどを見るのではないのでしょうか。」

Aさん 「私はそのホテルに泊まることにしました。」

ヲタク1 「怪しいなあ」

ヲタク2 「もっもっもし、もっしかして、浜崎様とのデートですか・・・もおもっもモエー!!」

ヲタク1 「そんなわけないだろう」

Aさん 「とりあえず、私は疲れていますので、部屋に行きたいです。では。」

ヲタク2 「だだだだだだだ だめだー!!」

と突然、田中さんがAさんの鞆を盗んで、ピョンと逃げ出します。

Aさん 「どろぼううう!!」

ヲタク1 ((田中君、よくやったな))

Aさんは田中さんの後を走って追いかけます。

その十三

Aさんが一生懸命走っていました。

「こいつ、早い!」

Aさんが街道走って渡ろうとする時、途中で横から来た車に気づかず跳ねられました・・・

Aさんが倒れてしまい、目を開けても、なにも見えませんでした。体も、動かせませんでした。音だけは聞こえました・・・

運転者が車からを出て、「ちえ、なんで急に渡るんだよ!」

女性の声 「大丈夫?だからスピードをあんまり出さないでと言ったでしょう。」

運転者 「浜崎さん、早く車に戻りなさい。パパラッチがいるかもしれない。」

浜崎あゆみ 「それはどうでもいい! 人が怪我してるでしょう!」

浜崎あゆみがAさんのそばに来ました。

浜崎あゆみ 「大丈夫?三船君、救急車呼んだよね?」

運転者 「それは読んでたらあなたのキャリアに危ないので・・・雑誌のことを考えなさい。」

浜崎あゆみ 「じゃああたしが呼ぶ!」

浜崎あゆみが携帯電話を出して、電話しようとしたとき、Aさんが手を上げて、止めました。

Aさん 「大丈夫。心配はいりません。」

Aさんがゆっくり座りました。

Aさん 「あいつ、私の鞆を盗んじゃった・・・」

浜崎あゆみ 「ああ、頭から血が出てる! 車の中に座ってください、ティッシュでふきます。」

Aさんが浜崎あゆみに手伝ってもらい立ちました。車の後ろに座って、頭をきれいにしてもらいました。浜崎さんがティッシュで拭いているとき、頭を上げて「ありがとう」といいました。

どんどん目が見えてきて、顔の前に浜崎あゆみの姿が現れます。

Aさん 「・・・天使ですか・・・私が・・・死んでしまったのか・・・」

浜崎あゆみ 「死んでません、大丈夫。頭が道路にぶつけてゆらゆらとしているだけです。もう大丈夫。私の医者を呼びましたので、そろそろ着きます。」

運転者 「とにかく、その人を自分のうちまで連れてやりましょう。ここにいるのはまずいんだから。」

浜崎あゆみ 「分かった。」

Aさんはホテルの住所を教えました。

ホテルに着いたら、頭がまだぼけていて、一人ではうまく歩けませんでした。

浜崎あゆみ 「あなたのホテルはどれですか?」

Aさん 「あ・・・ここです。」 [電車遊び]という名前のホテルを指で指します。

運転者 「ちょっと、なにそれ!」

Aさん 「私は、ここに泊まっています。」

浜崎あゆみはびっくりしましたが、Aさんの腕を取って、ホテルに入ります。

ヲタク1がちょうどその時ホテルのほうに戻って来ました。

「田中君は無事で逃げられたのかな・・・あれ?」

浜崎さんがAさんと一緒にラブ・ホテルに入ります。

「あ・・・あ・・・あ・・・ありえない!!」

ホテルの人 「いらっしゃいませー。予約しまし・・・あっ・・・あっ・・・いらっしゃいませ、浜崎さんですよ。」

「今のは忘れなさい。」と運転者が言いまして、一万円札を差し出します。

運転者 「そのこの部屋番号を教えたまえ。」

ホテルの人 「畏まりました。えっと、どちら様ですか？」

Aさん 「私は・・・Aといいます。」

ホテルの人 「A様ですね。ご予約の部屋は電車音とロープ付で、[終点]というスイートでございます。ご案内いたします。」

運転者 「結構です。鍵と部屋番号を」

ホテルの人 「あっ、はい。69号で7階にございます。」

「さ、行こう。その子を私に任して。」と、運転者がAさんを肩に置いて、階段を上ります。「ここで待ちなさい。」

浜崎あゆみ 「いやだ、一緒に行く。」

運転者 「ふむ。じゃ早く行こう。ここはまずいんだから・・・」

三人で、Aさんの部屋に着きます。そうして、運転者が部屋のドアを開くとき、後ろから浜崎さんが叫びました。

「きゃああああ」

運転者 「けっ、最低のところだね。」

浜崎あゆみ 「そうじゃなくて、今思い出した、その人のこと!」

運転者 「ん？知り合いですか？」

その十四

「大丈夫？」

Aさんは少し目を苦しんで開けます・・・近くに、女性の顔がぼけて見えます。

「先生・・・？」

アユミ 「先生 って・・・？」

あゆみさんがAさんのおでこに手を置いて、「まだ熱があるね」。

Aさんがあゆみさんの手をつかんで、目をしっかりと開きます。

Aさん 「ここどこ？」

アユミ 「あなたの・・・部屋、です。」

Aさん 「あなたは、どっかで見たことがあるような気がします。」

アユミ 「あっ、はい。今朝空港でサインを・・・私浜崎といいます。浜崎あゆみ。」

Aさん 「ハマザキ・・・その名前は聞いたことがあります・・・でも 思い出せない。あああ」

Aさんが頭を苦しんで、ぎゅっとあゆみの手を締めます。

運転者 「ちょっと、離せ！」

アユミ 「大丈夫!大丈夫。」

アユミ 「あなたの名前はAですね。それは覚えていますか。」

Aさん 「A... いや、思い出せない・・・ここどこ?部屋じゃないでしょう、ベットもないし。」とうろろ部屋を見ます。「電車みたい・・・あなたたちはいったい誰?私はどうしてここにいるんですか？」

アユミ 「・・・」

Aさんが立ちます。

Aさん 「飛行機に乗ったのを覚えています。そして、日本に着陸した・・・なぜか、日本に行きたかったみたい・・・」

運転者 「うん。自分の国に帰れば。」

アユミ 「ちょっと!そこまでいうことないでしょう!」

運転者 「だって、」

Aさん 「ああああ!思い出した!」

運転者 「まずい」

Aさん 「道を走って、」

運転者 「まずい・・・」

Aさん 「急に横から車が来て、」

Aさん 「・・・倒れた・・・」

アユミ 「それは・・・私の車でした。」

Aさん 「ん?あなた・・・」

運転者 「いやいやいや、私が運転をしていました。あゆみさんはなんの関係もないので」

Aさん 「大事なものを盗まれた」

運転者 「ね、聞ってる？」

アユミ 「大事なもの？」

Aさん 「うん・・・紙？」

アユミ 「紙ですか・・・パスポートとかですか？」

Aさん 「違う。 その紙に大切なことがのってある。」

アユミ 「なにがのっているのですか？」

Aさん 「それは・・・思い出せない・・・でも、大事で、見つけないといけない。」

アユミ 「よろしければ、一緒に探しましょう。」

Aさん 「結構です。」

アユミ 「でも、あなたはこの町のこと知らないでしょう。迷ってしまいますよ。私の車を使って三人でその泥棒を探しましょう。」

運転者 「ちょっと!」

アユミ 「もう決めたから。Aさん、おいで。」

アユミさんがAさんの手を取って、部屋を出ます。

運転者 「ちくしょう・・・」

その十五

Aさんと浜崎さんが、車の後ろに座っていました。外に雨が降り始め、Aさんが濡れた窓から外の景色をじっと見ていました。

「なんにも見えない。」と運転手がぐずぐずと言いました。

アユミ 「Aさん、私のことを、本当に覚えていないですか?・・・」

Aさんが浜崎さんのほうに顔を向いて、「うーん、思い出せない。ごめんなさい。」といいました。浜崎さんが自分の手を見て、「そのほうがいいかもしれません。」

Aさん 「どうして?」

アユミ 「私、たまに、違う人になりたいんです。っていうか、無名のころに戻りたい・・・」

Aさん 「そうですか・・・言いたいことがよく分からないですが、私は、あなたが・・・そういえば、あなたの名前は?さっき運転手があゆみといいましたね。上の名前はなんですか?」

アユミ 「私はハマ」

運転手 「ハママです! そう、ハママ アユミ」

Aさん 「ハママさんですか?ハママ アユミか・・・やっぱり、思い出せない・・・」

アユミ 「いや、私の本当の名前は」

運転手 「ハママさん! 電話なっていますよ!」

アユミ 「あ、本当だ。 じゅんちゃんだ・・・」

運転手 「(せっかくそいつの頭がおかしくなったのになぜ黙っててくれないんだよこの女)」

Aさんが外に向かいました。

アユミ 「じゅんちゃん、大丈夫?新しいパソコン買ったんだって?それはよかったね。うん。

うん。 分かった。 うん。 じゃあね。 わたしも。」

浜崎さんが電話を切って、Aさんに話し掛けよう、Aさんが叫びました。

「あああああ! いました! 車止まれ!」

運転手 「けっ」

車が止るとAさんは急いで出て、雨の中に走り出しました。

「待って!」と浜崎さんも、車を出ました。

運転手 「もうなんだよこの二人!傘も持っていないし!」

その十六

田中君が、コンビニでニヤニヤしながらエロ雑誌を立ち読みしていました。突然、誰かが後ろから肩に強く手を置きました。

田中君が後ろを向いて「な、なに？うわあ、お前!」

Aさん「あれはどこにやった？」

田中君「いや、あれってなによお。ちょっと、肩痛いので、離して。ぐわあ」

Aさん「わたしの大事な紙をどこにやったんだ!」

田中君「ああ、あ、あ、あれのことか。こ、こ、ここにあるよ。」田中君が床に置いた鞆を指しました。Aさんが、その鞆を拾ったとき、急に田中君は逃げ出しました。「っばーか」と言って、出口に行ったら、女性が立っていました。

田中君が「どけばかおんな!」と言った瞬間、その女性につ強くびんたされました。

田中君「この!・・・ ああ!ああ! 浜崎様!なん、なん、なんで!？」

あゆみさん「あなたのこと覚えてますよ。確かに、わたしのファンでしたね。」

「あ、はい!浜崎様の大ファンです。」と田中君が土下座をしました。

あゆみさん「あなたみたいなファンはいりません。さあ、あの人に、盗んだものを渡して。」

田中君「あ、はい。」田中君が泣きながら、コートの中に隠してたあゆみさんの写真を出しました。「それだ」とAさんがそのときやってきて言いました。

あゆみさん「それが・・・あなたの大事なもの・・・でしたか？」

Aさん「そう。でも、その写真でなくて、その写真に書いてあることです」。Aさんが田中君の手から写真を取って、裏に手で書かれた文書を読みます。

Aさん「これ、メールアドレス・・・なぜこれが大事だったのか、思い出せない」。Aさんはひざまずきました。

田中君「大事だって理由は当たり前じゃ!だからなんで浜崎様がその関係ないやつに教えてあげたんですか!?!ぼくにはまったく理解できない!」

Aさん「浜崎様って?・・・」Aさんは写真をもう一度見てみました。

Aさん「ああ、これ、あなたの写真だったんですね。」

あゆみさん「そう。今朝Aさんがわたしにサインをしてもらいに来ました。そしてそのとき、わたしは自分のメールアドレスも書きました。」

Aさん「あなたのメールアドレス・・・これが大事だったんですか・・・ってことは、わたしたち、知り合いですか？」

田中君「知り合いなわけないだろう!お前はぼくみたいにただの浜崎様のファンだよ!世界が違う!」

Aさん「浜崎 のファン・・・わたし、それが、思い出せない。」

あゆみさん「思い出さなくていいの。わたし、わたしのことを知らないAさんのほうがいい」

「おおい、傘持ってきた!」と雨の中を走ってきたあゆみさんの運転手が言いました。

運転手「ん?なんでこの二人がそんなところで転んでいるのか?目立つんじゃない!ほら、早く立って!」

Aさん「あああ」

Aさんが立ったら、鼻から血が出てきました。

あゆみさん「Aさん!!早く、三船君!救急車を呼んで!」

運転手「だから、まずいんだって」

「お父さん!この人死ぬかもしれない!」とあゆみさんが運転手に目にあわせて言いました。

「 わかった」と運転手が携帯電話をだしました。

Aさん「おとう・・・」

あゆみさん「Aさん、座ってて。無理やり話さなくていいから。救急車がもうすぐ来ますので、がんばって。」

Aさん「あゆみさんは、・・・目がお父さんと似ていますね・・・きれいな目で・・・」

そして、Aさんが倒れました。

最終話

Aさんは目が覚めた。白い部屋のベッドに横になっていた。体があんまりなにも感じられなかった。だけど、右手はなぜか温かかった。自分の心臓の音以外はなにも聞こえなかった。右側に開けっ放しの窓からやさしい風が吹いてた。外は、青空。

しばらくそのまま外をみた。体の力が戻って、座ろうとしたとき、誰かが横に座っていたことに気づいた。女性が寝ながら、Aさんの手をしっかりとつかんでいた。

「あゆみさん・・・」と小声でAさんが言った。

あゆみがゆっくり目を覚ました。

「Aさん・・・やっと起きましたね」といいながら、あゆみはAさんの顔にやさしく手を置いた。

Aさん 「ここ、病院？」

あゆみ 「そう。昨夜からあなたはずっと寝ていました。でも、先生は大丈夫だと言っていました。」

Aさん 「あゆみさんは、ずっとここにいたんですか？」

あゆみ 「うん。心配してて、見守っていました。」

Aさん 「私、夢を見た。その夢の中には、あゆみさんが出てた。思い出したよ。私は、あゆみさんのことが好きだった。」

あゆみ 「そうですか・・・」

Aさん 「でも、それは、本物の恋じゃなかった。ただ、私は日本が好きで、日本の何でも好きで、・・・夢で分かったよ。私は、自分の人生は意味がないと強く感じて、生きる目的が必要だった。そしてある日、日本に興味を持ち始めた。段々、自分の人生の目的が日本で暮らすことだと自分を説得するようになった。でも、それは、全くの妄想だった。日本人と結婚しないといけないまで思い込んでしまった。その日本人はあゆみさんだとも、考えてしまった。私、遠くまで来て迷ってしまった・・・」

あゆみ 「Aさん・・・」

Aさん 「私、バカだったな。やっと、目が覚めた。」

あゆみ 「そんな・・・」

Aさん 「迷惑かけて、本当にすみませんでした。」

あゆみ 「謝ることがないですよ。実は、あたしの車でAさんを・・・」

Aさん 「私フランスに帰る。」

あゆみ 「え、でも、着いたばかりで・・・」

Aさん 「そして、新しい生活を始める。」

あゆみ 「あたしは、今のままのAさんが好き!」

それを聞いて、Aさんは無言になった。

あゆみ 「昨日は、あたしが歌手だってことを忘れて、本当のあたしを見てくれていました。それは、とても嬉しかった。もっと、本当の自分を知ってほしくなりました。だから。だから、まだフランスに帰らないで、あたしのそばに、もう少しいて欲しいです。」

あゆみの顔に涙が流れた。

あゆみ 「わがままだなあたし・・・ごめん。」

あゆみが突然立って、窓のところに行った。

そして、Aさんはベットを出て、あゆみのそばに来た。二人は窓から青空を見て、黙ってた。

Aさん 「わかった。もう少し、こっちにいる。あなたが、歌手だってことを、忘れてあげる。昨日出会った知らないあゆみが、歌手のあゆみよりも、ずっと好きだからさ。」

あゆみ 「・・・ありがとう。」

Aさん 「でも、その代わりに、私がファンだったってことも、忘れてくれ。これから、本当の自分を、探してみる。手伝ってくれる？」

あゆみ 「うん。」

外は、夏の白い雲が空に流れていた。